

新村 出編

広辞苑

第二版補訂版

岩波書店

新村

出編

広辞苑

新起

岩波書店

広辞苑 第二版補訂版

(机上版)

昭和三〇年五月二五日 第一版第一刷発行
昭和四年五月一六日 第二版第一刷発行
昭和五年二月一日 第二版第一刷発行
昭和五年九月二〇日 第二版第一刷発行
補訂版第五刷発行

定価 九八〇〇円

編者 新村 出

発行者 緑川 亨

印刷者 北島 義俊

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二、五、五

電話 〇三、六五、四三
振替 東京六、六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

自　序〔第一版〕

いまさら辞典懷古の自叙でもないが、明治時代の下半期に、国語学言語学を修めた私は、現在もひきつづいて恩沢を被りつつある先進諸家の大辞書を利用し受益したことを忘れぬし、大学に進入したころには、恩師上田万年先生をはじめ、藤岡勝二・上田敏両先進の、辞書編集法およびその沿革についての論文等を読んで、つとに啓発されたのであった。柳村上田からは新英大辞典の偉業の紹介を「帝国文学」の誌上で示され、目をみはって海彼にあこがれた。われらもいかにしてか、理想的な大中小はともかくも、あんなに整った辞典を編んでみたいものだと、たのしい夢を見たのであった。

かくて、英米独仏の大辞書の完備に対して限りなき羨望の情が動き、ひたむき学究的な理想にのみふけりつつ、青春の客気で現実的方面については一層暗愚であったことは、後年とほぼ同様であった。卒業後の三年めの明治三十五年（一九〇二）から凡そ五年間、それぞれの大辞典の編著や統理に成功を収めた上田・大槻・芳賀・松井等の諸先覚には、他方において国語の研究や調査や教育や改善やの諸事業にわたって計るべからざる種々の資益を得たことが、かれこれと想起されてくる。とりわけ、上田・松井両博士の「大日本国語辞典」と、大槻博士の「大言海」とに関しては、身親しくその編集室に見学した縁故もあったのみか、殊に後者の校訂には深く参与し、前者の再刊に際しては僅少ながら接触したゆかりもあって、自分のためにも、何かと参考に資せられて幸福であった。その後も、かれこれ二つばかりの辞典の編集に参画はしたものの、元より綜合統理の任に当った次第ではなかった。それに反して、自分の仕事は、主として語原や語史、語誌や語釈の、主として分解的な、しかし根本的本質的な方面の考究に専念し、綜合的方面の事業に意を致し力を注ぐまでには至らなかった。それは、自分自

身の研究が、当初は音韻および文字に、やや進んでからは漸次語法や語義に及び、後年には段々と語誌に向って来たのであって、要は分解を主とし、綜合にうとかった。

今から二十年前、私の辞典の処女作が出来て、望外の歓迎を受けたが、内心大いに満足し得ず、「言海」の著者が、古く率直にその巻末に録しておいたごとく、そんなに良く出来あがったものは無く、ただ直してゆくばかりだ、と思つて、すぐさま改訂の業を起し、或は簡約し、或は増訂し、同時に業を進めて、大戦の末期に入り、改訂版の原稿が災厄に帰した。簡約版は衆知のごとく、早く印行して世に出でたが、しかし私に代つて戦時中には、統理の傍ら、他方には、新たに、語詞の採訪と採集とに力を尽くしつつ専ら改訂の業に従つた私の次男猛は、苦心努力の結果、辞書編集上、望外にもこよなき良い経験と智識とを得たかと信ずる。彼自身もまたフランスの大辞典リットレないしラルース等の名著およびダルメステール等の中辞典から平素得つつある智識を、他山の石として、乃父の改訂「辞苑」旧版本の礎石の材料にも供してくれた。彼は従前のごとくには、今回の「広辞苑」の編集に関して、協力する余裕は十分でなかったが、名古屋大学の行余の力をこれに注いでくれ、老父の能くせざる所を補足し、編集および印刷の進行、人事その他各般の統理に心を尽くしてくれた。現代の国語に対する智識と感覚とについては、当然長所の在ることは認めてよろしく、その点において、むしろ語史にのみ傾倒せる編者の粗漫な一方面を補佐してくれたことを付言したい。また、グリム兄弟の場合とは、全く違った情味が存する。

以上、主として改訂「辞苑」の進行および始末について述べつつ、その善後の処理に及ぼしたとが、戦後その改訂版の長所を保存し、短所を除去し、内容形態共に新時代の要求に応ずる必要上、根本的修正と増補とを施すことを得たのは、昭和二十三年九月より岩波書店内に設置された編集室において、斯業の経験と智識とを具備する市村宏氏を編集主任となし、終始一貫、増訂の業を進めたことによる。爾来、編集部はこの複雑な編集に従事し、その間いくたびか内員外員の増減変動と場所の転移等とを見たが、書店内外よりの定期臨機に囑託された

諸員諸君の格別なる協力に依って、編集すでに了り、校正および修治の業、將に完成せんとするに至ったのは、まことに欣懷といたす所である。

抱負と実行、理想と現実、その間、自分の未熟か老境かよりして、事志と違った趣きがあることを自省してやまないが、とにかく、簡明にして平易、広汎にして周到、雅語漢語、古語新語、慣用語と新造語、日用語と専門語、旧外来語と新外来語、新聞語と流行語、みなつとめて博載を期した。発音の正確と語法の説明には意を注ぎて、規範を示さんと欲したけれども、現在の規範こんんととして未だ定まらぬ不便をなげかねばならなかった。

誇称してもよいが、われら父子が親交ある哲学・史学・文学の先進同友をはじめ、今日の科学界に令名あり世界的榮譽をも博せられた碩学者より、直接にも間接にも指示を受けた語詞の説明も少なからず存し、花さき実のれる、この言語園を展望しながら、感激してやまぬ心境に在るのである。従来経験により、あとからあとから、自他の注意から、種々補修を要することが、殊に一般辞書の上には生じがちなのを按ずるが、さりとて先進の辞典学者の引いた言葉にたよって、あのラテン語の金言や、ゲーテの箴言にもあるがごとき、過まるは人のつね、容るすは神のみち、とやら申された遁辞めいた文句にすがる気はない。ただ周密な眼光をもって徹底的に過誤なきを期したばかりである。

もしそれ、物の順序からすると、大辞書が先きに出来あがってから、その後、それらの成果を收拾し拔萃し、簡易に平明に、短縮して編集してこそ、より完全な中小辞典、簡短（ショート）とか、要略（コンサイス）とかの文字を冠らせた中小型の辞書が作られるわけであるが、私一個の場合、その逆のコースを進んで来たので、殊に現今わが国語界の標準規律は未だ緒につかず、新語の粗製濫造のはげしい時代には、程よき中辞典の達成は、省みるに早計であったかも知れない。

上記のごとく、本書は、当初の出発点こそ改訂版をいささか加除し修正する程度から進んだのであったが、い

つしか本来の節度をかなり超えて、根本的修正が、ひとり文字の表記法のみにとどまらず、載録語詞、分量の上のみならず、かなり本質的にも及ぶことになってしまった。結局、実質にも、形式にも、少なからぬ進歩の跡がみとめられると信ずる。従って、頁数や組方の上にも、多大の影響を及ぼし、厚みその他装幀等色々な点にも、予想以上の多難を感じねばならなかった。

かくて、編集完成の時期もおくれたし、諸般の煩雑名状しがたい苦難も嘗めなければならなかった。編集部においても、辛うじてこれらの難を克服し得たのであるが、部員の手不足などを補充するために、書店の内部からも、俊敏練達の士の参加協力を得ると共に、臨時に外部からも特に明達懇篤な新進諸学人の援助をも求めることとなり、内外一和、衆力一致、他方もちろん熟練な校正員の補翼にも由り、着々、印刷の工程もなめらかにはかどり、ここに発行の機運に恵まれるに至ったのは、編者の満足これに及ぶものはない。

それら諸彦の助力を跋文中に銘記するに先だって、特に今記すべき一事は、畏友大野晋氏が、語法と基本語詞につき、更にその同窓板坂元・竹内美智子両氏の協力をも得て、応急適切な援助を寄せられたことである。

斯業行程の始終に関しては、一に岩波書店前店主故岩波茂雄氏の宏量と、現社長同雄二郎氏の寛厚に感謝すると共に、事業の進行上絶えず店内の練達者諸賢から、啓発激励を蒙ったことを肝銘する。さかのぼっては、前行「辞苑」の出版改訂時代の、博文館の上局諸氏と、忠実なる編集主任たりし溝江八男太翁と内助の一老友をも想起せざるを得ない。曾て「私の信条」として書いた如く、老至って益々四恩のありがたきを感じるのみである。

昭和三十年一九五五年一月一日

京 都 新 村 出

第二版の序

「広辞苑」第一版発刊後、十年を経た昭和三十九年の盛夏、やがて米寿を迎えんとする今は亡き編者と岩波書店との間に本書の改訂について話し合いがなされた。それに従って編者側は、語源語誌及び外来語を分担し、その他の国語項目と百科項目とのすべては書店が中心となり、百余名の専門学者の協力を仰ぐこととなった。

編者は、初版上梓以来この時に備えて孜々として力めては来たが、老衰の度はとみに加わり、第一版編集当時とは異なり、自ら筆を執って原稿を認める身心の気力はすでに失っていた。そのため、語源語誌補筆の仕事は、東辻保和氏に、ついで編者他界後は金岡孝氏に依頼し、また外来語は深萱和男氏が担当、漢語項目は新村秀一が分担、さらに編集全般については第一版と同じく大野晋氏の肯綮に当る教示を受けた。

一方、書店でも十分に編集の体制をととのえ、専門学者の執筆・指示・助言を得て、原稿の完成に勉勵すること約二年、四十一年の暮には校正刷の一部が編者の枕頭に届けられ、編者は満足と感謝の念をもってこれを手にはしたが、時すでに自ら改版進捗の労を執る気力はなく、ただその完成の一日も早からんことを願い、ひたすら、それを筆者に托するのみであった。明けて四十二年の春には第二版完成の日まで生きながらえる望みはすでに棄てたように見え、そして八月十七日、九十一歳をもって世を去った。

その後編纂の業は着々として進捗はしたが、第一版編纂以来、この十数年間に、国語・国文学の文献学的研究、古典の翻刻、時代別国語辞典・専門特殊用語辞典及び古典文学の索引の刊行等実に見るべきものが多く、また人類社会の歴史の変転、世界の科学技術の進展も停まるところを知らず、それらの成果と変動と進展をあますところなく吸収し、集約することは、当初の予想をはるかに越え、第二版とは言いながら、全く新しい辞典を作るのと同じ労力を要するほどの困難な仕事となった。

それがため、さらに総合的な整理・編集を行う必要から、国語項目を金岡孝氏が、百科項目は筆者が編集に当りつつ、全般についての責任を筆者が執ることになった。なお、付録の「通用漢字一覧」については大野氏の指導の下に清水功・近藤政美両氏を煩わし、また、新村祐一郎、新村徹、平山久雄、沢田茂生、福田菊子にもそれぞれの分野に於いて一臂の力を借りた。それらと相俟って、さらに多くの専門家と岩波書店の諸君の一層の協力により、ともかくも、辞典編纂法の現在の水準をいささかなりとも越え、亡き編者の学風にさらに忠実となり、しかも語源語誌説の採録についても第一版よりはるかに充実した第二版を世に送ることが出来たことは望外の喜びという他はない。

ただ、憾むらくは、あれほど本書の刊行を待望していた編者はすでに亡く、問うても答^{こた}えなき墓前に本書を献ずることになったことである。

さきに名を記させて頂いた諸氏をはじめ、すべての協力を惜しまなかった先学諸賢に対し、ここに故人に代って深甚の謝意を表し、併せて読者諸兄の忌憚なき批判を乞い、以って将来の改訂に備えたいと思う。

昭和四十四年一九六九年三月

新村 猛

第二版の補訂に当って

昭和四十四年の春、第二版を発刊して以後すでに七年半を経過したが、この間における内外社会の変動や言語生活の推移に応じて、今回最小限度の補訂を加えることにした。数百に及ぶ新項目の採録を始め、制度等の改変に伴う補筆、人口その他データの更新（凡例参照）が主要なものである。これらの作業に貴重な援助を賜った専門家諸氏及び諸機関にたいして深謝の意を表する。（昭和五十一年十一月）

凡 例

編集方針

- 一、この辞典は、国語辞典であるとともに、學術専門語ならびに百科万般にわたる事項・用語を含む中辞典として編修したものである。ことばの定義を簡明に与えることを主眼としたが、専門語についても語源・語法の解説に留意した。収載項目はすべて約二十万である。
- 二、国語項目は、現代語はもとより、古代・中世・近世にわたってわが国の古典にあらわれる古語を広く蒐集し、その重要なものを網羅した。漢語・外来語のほか、民俗語・方言・隠語・慣用句・俚諺の類についても、その採録に意を用いた。
- 三、わが国語のうち最も基礎的と思われる語約一千を選んで、その語義・用法などを特に詳述した。選択した語の範囲は、活用語はもとより、助詞から名詞・代名詞にわたる。
- 四、国語項目の解説に当っては、つとめて古典から文例を引用し、語の用法を実地に示した。また、かなづかいや発音を定めるについては、古辞書・訓点本の類に照らして正確を期した。
- 五、語源・語誌は、編者の説を中心にして諸家の説をも参酌し、要約して注記した。必要に応じて、漢語にはその出典を、外国語の訳語にはその原語を揭示した。
- 六、百科的事項の収載範囲は、哲学・宗教、歴史・地理、政治・法律・経済、教育、数学・自然科学・医学、産業・技術・交通、美術・芸能・体育・娯楽、語学・文学などの万般にわたり、人名・地名・書名・曲名・年号などの固有名詞にも及ぶ。わが国の人名は死没者に限った。

七、挿図は服飾・調度・紋様・風俗・動物・植物・建築・器械その他各方面にわたって約二千図を収め、解説文の理解を助けるよう配慮した。

八、現代一般に行われている漢字約三千を選び、その音訓ならびに送り仮名、当用漢字・人名用漢字の別、新旧の字体を一見して知りうるよう、巻末に『通用漢字一覧』を付録した。

見出し語

かなづかい 表音式かなづかいに従って太字で表記した。和語・漢語には平仮名を、外来語には片仮名を用いた。

1 ここにいう表音式かなづかいは、いわゆる現代かなづかいとほぼ一致する。

ただし、二語の連合または同音の連呼によって生ずる「ぢ」または「づ」については、これをすべて「じ」または「ず」で表わし、また、助詞の「は」「へ」「を」はそれぞれ発音通りに「わ」「え」「お」で示した。この場合、右に該当する仮名の下にはくでかこんで現代かなづかいを注記した。

はな・じハナジ「鼻血」

た・ずタズな「手綱」

ち・ぢチヂむ「縮む」

つ・づツヅく「続く」

2 こんにちはコンニチハ「今日は」

お・ことオコトてん「平古止点」

づかい、くがつクガツについている場合はそのかなづかいと相違するものは、その相違する部分を見出し語の下に片仮名で小さく記した。

あおいアオイ「葵」

が・つガツこう「学校」

おうさかオウサカ「逢坂」

おおさかオオサカ「大阪・大坂」

とお・かトウカ「十日」

もよお・すモヨオス「催す」

いれ・じイレジえエ「入知恵」

うわ・じウワジようしヨウシ「上調子」

- 3 外来語および外国語の地名・人名などの片仮名表記については国語審議会報告『外来語の表記』（昭和二十九年三月）ならびに文部省『地名の呼び方と書き方』（昭和三十三年十二月）を参考とした。ただし、中国・朝鮮の地名・人名は一般に漢字音によった。

※長音を表わすには「ー」を用いた。

※原語における「ㄱ」の音は、原則として「ヴ」を用いず、一般に「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」で表わした。

見出し語の区切り

- 1 語構成を示すため、語源上からこれを二つの基本部分に分ち、「・」でつないだ。時として三つ以上に区分したものもある。

あがき〔足掻〕

ふ・かのう〔不可能〕

う・のはな〔卯の花〕

しか・のみ・ならず〔加之〕

語源を確定しがたい場合、また、語形の変化によって区分しがたい場合は、「・」を付さなかった。

やなぎ〔柳〕（ヤノキ（矢筈木）の転か）

やよい〔弥生〕（イヤオヒの転）

ちよونا〔手筈〕（テヲノがテウノと転じ、更に訛ったもの）

もの

- 2 人名は姓氏と名との間で区切り、地名・作品名・年号などは原則として切らなかつた。

- 3 活用する語は、原則としてその終止形を見出し語とし、語幹と語尾との間に「・」を付した。その位置が語構成を示す「・」と合致する時は、「・」のみを付した。

あがる〔上がる〕〔自四〕

あ・げる〔上げる〕〔他下一〕

うれし〔嬉し〕〔形シク〕

うれし・い〔嬉し・い〕〔形〕

めく〔接尾〕体言について四段活用の動詞をつくる。…

かえり・みる〔顧みる〕〔他上一〕

表記形 「一」の中に、見出し語の仮名に相当する漢字または外国語の綴りを示した。

（漢語・和語）

- 1 相当する漢字がいくつかある場合は、現代標準的と思われるものをもって代表させた。また、いわゆる代用漢字については、国語審議会報告『同音の漢字による書きかえ』（昭和三十一年七月）などを参照して、一定の範囲で採用した。

※「弘報」（コウホウ）と「広報」（クワウホウ）、「聚落」（シュウラク）と「集落」（シフラク）とのように、字音かなづかいが異なるものは、別語として扱った。

- 2 送り仮名は歴史的かなづかいに従って施した。内閣告示『送りがなのつけ方』（昭和三十四年七月）に示された原則を参照しつつ、旧来の慣行をも考慮して送った。動詞から転成した名詞の類には一般に送らないことにした。

あたる〔当る〕

あ・てる〔当てる〕

おこなう〔行ふ〕

おこない〔行〕

ほとんど〔殆ど〕

き・に・いり〔氣に入り〕

（外来語）

- 3 外来語については、わが国に直接伝来したと考えられる原語を掲げ、その言語名・国籍を注記した。ギリシア語・ペルシア語・ロシア語などは適宜ローマ字に音写した。また、英語の場合は一般に国籍の注記を省略した。漢字を当てる慣行の定着している語にはこれを並記した。

シャボン〔sabāo 皷〕

ガス〔gas ガス・瓦斯〕

シャポー〔chapeau ショ〕

テーマ〔thema テー〕

イクラ〔ikura イ〕

デスク〔desk〕

中国語および漢字訳のある梵語・朝鮮語などの場合は、「一」内

にその漢字を掲げ、適宜、原語音をローマ字で示した。

マージャン【麻雀】(中国語)

チョンガー【総角】(朝鮮語)

ペキン【北京】(Pei-ching; Peking)

バラモン【婆羅門】(梵語 Brāhmaṇa)

- 4 外国語の固有名詞には、原則として国籍を注記せず、解説の叙述で分るようにした。人名の場合は姓だけでなく名をも示し、また、原語における冠詞の類は多く省略した。

セーヌ【Seine】フランスのパリ盆地を流れる川。

ハーグ【Den Haag】オランダの都市。

カエサル【Caius Julius Caesar】ローマの武将・政治家。

- 5 原語音からいちじるしく転訛した外来語、または外国語に擬してわが国で作られた語には、その欧語綴りを「」内に入れず、()でかこみ、あるいは(和製語)と注記した。

シュークリーム (chou à la crème ^{シュ})

ハヤシ・ライス (hashed meat and rice)

エキス【越幾斯】(extract ^{エクストラクト} の転)

ミシン (sewing machine の略訛)

ナイター (和製語 nighier)

テーマ・ミュージック (和製語)

- 6 片仮名で表記した外来語と平仮名で表記した和語・漢語との複合した語は、一般にその片仮名に相当する部分を「」で示し、必要に応じてその複合語に相当する外国語の原語を注記した。

アジア・じんしゅ【人種】

かいきん・シャツ【開襟】

エーゲ・かい【海】(Aegean Sea)

サリチル・さん【酸】(salicylic acid)

- 7 「」内の外国語を以下の記述で繰り返す時は、その欧語綴りを省略して「」で表わした。

オーバー【over】… —コート【coat】… —タイム

【time】… —ローン【loan】…

スミス【Smith】①(Adam) イギリスの経済学者。…

②(William Robertson) イギリスの聖書研究者。…

品詞の表示 品詞の別は、巻末付録『国文法概要』の所説に従い、略語をもって『』内に示した。(『略語表』(二三頁)参照)

- 1 名詞および連語には、原則として品詞の表示を省略した。

- 2 動詞には自動詞・他動詞の別ならびに活用の種類を、形容詞には活用の種類を示した。活用の種類に関する詳細は、巻末に付録した動詞・助動詞および形容詞の活用表を参照されたい。

※口語動詞の四段活用を五段活用とする呼び方も行われるが、本辞典では採らなかった。

活用語の口語形 文語と口語とで終止形の異なる語は、それぞれ別に見出しを立てた。

- 1 解説・用例は文語項目にまとめて施し、その末尾に口語形を掲示した。文語・口語両項目が排列上相並ぶ場合は、この掲示を太字にして、口語形の見出しに代えた。

【す・つ【捨つ】(他下二) … □語【すてる(下二)】

【す・てる【捨てる】(他下一) ↓すつ(下二)】

【ちかず【く【近付く】(他下二) … □語【ちかず【ける(下二)】

一)

うれし【嬉し】(形シク) … □語【うれし・い

- 2 サ変動詞は、一般に、口語形を見出しとしては立てず、文語項目の末尾に掲示した。

くつ・す【屈す】(自サ変) … □語【屈する

あい・す【愛す】『他サ変』… □ 愛する(サ変)・愛す(四)
ろん・ず【論ず】『他サ変』… □ 論ずる(サ変)・論じる

(上一)

見出し語の排列

五十音順 表音式かなづかいの五十音順により排列した。

1 濁音・半濁音は、清音の後に置いた。

し・さい【子細】 へん・き【偏諱】

し・さい【資財】 べん・き【便器】

じ・さい【持斎】 べん・ぎ【便宜】

じ・ざい【自在】 へんき【番瀝青】

2 促音(そく)・拗音(おん)などを表わす小字は、直音の後に置いた。

さ・つき【五月】 ひ・よう【費用】

さ・つき【殺氣】 ひ・よう【表】

ざ・つき【座付】 び・よう【美容】

ざ・つき【雑記】 び・よう【秒】

3 長音符「ー」は、すぐ上の片仮名の母音(ア・イ・ウ・エ・オのいずれか)を繰り返すものと見なして、その位置に排列した。

コーヒーはコオヒイ、セーターはセエタア、ウールはウウルの位置に置く。

同音の語の排列 見出し語の仮名表記が全く同じである場合は、

順次つぎの基準に従って排列した。

1 品詞の順——名詞、代名詞、動詞、形容詞、連体詞、枕詞、副詞、助動詞、助詞、接続詞、接頭語、接尾語、感動詞の順

連語は、体言相当のものは体言の、用言相当のものは用言の後に置いた。一つの項目を二つ以上の品詞に分けて解説する時は、

最初の品詞の順に従った。

こう【公】 あらし【嵐】

こ・う【恋ふ】『他上二』 あらし【荒し】『形ク』

こう【斯う】『副』… 『感』 あらし【アルラシの約】

こう【抗】『接頭』

2 和語・漢語・外来語の順——品詞を同じくする場合は、一般に

和語を前に、字音語を後に置いた。外来語は、その原語の品詞にかかわらずなく、名詞の末尾に排列した。

同音の字音語は、「一」内の首字の字画数の順に並べた。

※「法」(ハフ・ホフ)および「講」(カウ・コウ)は、慣習に従って

漢音と呉音とを使い分け、それぞれ項目を別に立てた。

こうじ【麴】 めす【雌・牝】

こうじ【小路】 めす【mes】

こうじ【工事】 め・す【召す】『他四』

こうじ【講師】

こうじ【講師】

3 普通名詞・固有名詞の順——地名・人名・作品名・年号など固有の名称は、原則として同音同字の他の名詞と項目を併せず、別に見出しを立ててその次に並べた。これら二つの項目が排列順位の上で相離れる場合には、普通名詞の項目の解説末尾に(地名別項)(書名別項)などと注記した。

親項目と追込項目 複合語は、語構成上の最初の部分が見出し語

として掲げてある場合には、それを親項目としてその下にまとめ、追込項目とした。ただし、一語意識のつよい語は独立項目とした。

1 追込項目の見出し表記は、その親項目に相当する部分を繰り返さず、「一」で示した。

2 親項目は、見出し語の仮名が三字以上(促音・拗音などを表わす仮名も字数に算入)から成る語に限った。ただし、漢字一字の

字音語は親項目としない。

やっこ〔奴〕……―あたま〔奴頭〕……―ことば〔奴詞〕……

―だこ〔奴胤〕……―どうふ〔奴豆腐〕……

しょき〔暑氣〕……―あたり〔暑氣中〕……―ばらいびつ

〔暑氣払〕……

※「有為(ゐゐ)」に「有為転変」を、また、「食(しょ)」に「食あたり」

「食中毒」などを追い込まない。

- 3 固有名詞を冠した複合語は、それが普通名詞であっても、その固有名詞を親項目として追い込んだ。人名の場合は、姓氏を親項目としてまとめた。

おうみ^ワ〔近江〕旧国名。……―あきんど〔近江商人〕……

―おんな^{ナシ}〔近江女〕……―じんぐう〔近江神宮〕……

―せいじん〔近江聖人〕……―りょうぐう〔近江令〕……

ごとう〔後藤〕(姓氏)――しさん〔後藤芝山〕……―てん

〔後藤点〕……―ぼり〔後藤彫〕……―またべえ^エ〔後

藤又兵衛〕……―ゆうじょう^{イッ}〔後藤祐乗〕……

※見出し語の仮名が二字以下の固有名詞、例えば地名の「滋賀(しが)」または姓氏の「紀(き)」に、「滋賀浦(うらの)」〔滋賀山〕または「紀海音(きのうみ)」〔紀貫之(あかつ)〕などを追い込まない。

慣用句 その最初の一語を見出しとする項目の次に、行を改めて

太字で掲げた。

- 1 見出しは、漢字・仮名まじり、現代かなづかいで表記し、その五十音順に並べた。

- 2 最初の一語は「―」で示した。ただし、その部分が活用語である場合は「―」を用いなかった。

- 3 最初の一語が複合語で追込項目となっている場合は、その追込項目の解説中に用例の形で掲げ、そこに注釈を施した。

凡 例

解 説

本文の表記

- 1 説明の本文は現代かなづかいに従って表記した。動植物名・外来語、また、文法上の解説として発音や語形を示す場合は、適宜に片仮名を用いた。

- 2 漢字の字体は、当用漢字(昭和二十九年三月発表の補正案によって追加されたものも含む)ならびに人名用漢字はいわゆる新字体を、他は広く通用している字体を採用した。

語釈の区分 語義がいくつかに分れる場合には、原則として語源に近いものから列記した。

- 1 区分を明らかにするため、①②③…の番号を付した。さらに大きく分類する場合は①②③…の符号を、細かく区分する場合には①㊦①…の符号を用いた。

- 2 一つの項目を二つ以上の品詞に分けて解説する時は、それぞれの品詞表示の前に㊦㊦㊦…の番号を付した。

術語の分類 専門学術用語には、その範疇を明らかにするため、必要に応じて、解説の冒頭に「―」でかこんでその語の分類略語を標示した。(『略語表』(二三頁)参照)

かじつ^ツ〔果実〕①〔植〕種子植物の花が受精し、その子

房及び付随した部分の発育・成熟したもの。…②特に、液果のうち食用となるものの称。くだもの。…③〔法〕元物から産出される収益物。…

漢語の出典 漢語または諺(ことわざ)の類には、必要と認めた場合、漢籍の出典を「―」でかこんで解説の冒頭に掲げた。原典名の下に小字で篇・章名を付した。

ふわく〔不惑〕〔論語為政〕四十而不惑〔四〇歳の異称。〕

用例 語義の理解を助けるため、つとめて用例を掲げた。

1 古典からの引用文は、平仮名・歴史的かなづかいによって記し、また、原典の仮名を漢字に、漢字を仮名に改め、漢文を読み下しにするなど、かならずしも原文のままではない。

2 用例中、語句の一部を省略した場合は、「…」で示した。また、難解の語句には、()でかこんで、現代かなづかいによる読み仮名を割書し、または注釈を施した。

ついえ エヒ **【費・弊】**…②つかれ苦しむこと。弱ること。太

平記三七「あはれーに乗る(弱点につけこむ)処やと思ひければ」

3 引用古典の書名は多く略称を用い、巻名・章段名などは小字で付記した。(『引用文献略称一覧』(二三頁)参照)

4 見出し語に相当する部分は「―」で略した。活用語の場合は、語幹を「―」で表わし、「・」をつけて活用語尾を送った。ただし、語幹と語尾とを分けにくい場合は「―」を用いなかった。

さびし **【寂し】** **【形シク】**①…源若葉下「傍ししき慰めにもなつてむ」。「口がさびしい」…**【口さびしい】**

いる **【射る】** **【他上二】** (ヤ行) …万「ますらをのさつ矢手挿み立ち向ひ射る円方(むす)は見るにさやけし」

たり **【助動】** (活用たら・たり・たり・たる・たれ・たれ) ①体言について指定の意を表わす。平家二「君、君たらずといへども、臣以て臣たらざるべからず」。「教師たる者」

典拠

1 かなづかいや清濁その他発音などに関して、古辞書・訓点本の類を典拠として掲げる場合は、原文のまま引用した。「日葡辞書」のローマ字書きは片仮名にうつした。原文を引く必要のない時はへんかこんで単に書名のみを示した。

ひさご **【瓢・瓢】** …③ **【柄杓】** **【杓】** と書く **【ひしやく】** に同じ。和名抄一六「杓、比左古」

あまつさえ サマツ **【剩へ】** **【副】** (アマリサエの音便。今誤つてツを促音とせず、アマツサエともいう) そればかりか。

日葡「アマツサエ」

いぬき **【砌】** 階下の石だたみ。〈新撰字鏡五〉

あざらけ **【し】** **【鮮らけし】** **【形ク】** あざやかである。新鮮である。〈靈異記下訓釈〉

2 類書その他に説くところに依拠して解説を施した場合には、解説末尾に、()でかこんでその書名を注記した。

うんたろう ウラ **【うん太郎】** うっかり者。(俚言集覧)

その他

1 紀年は一般に西暦に従った。日本年号との対照には、巻末付録『西暦和暦対照表』を利用されたい。

2 () 内に二行書きで示した西暦紀年は、人名の場合は生没年、年号はその行われた期間、その他、在位・在職期間などを表わす。

3 国や都市の人口は、必要と思われるものにのみ記した。わが国に関するものは総理府統計局「昭和五十年国勢調査」による数字である。外国のものは国際連合編『世界人口年鑑』一九七四年版により、調査年次を() 内に注記した。中国の場合など、これ以外の資料を参照したのも若干ある。

4 外国の作品名や学術語の邦語訳には、その原語を()でかこんで解説の冒頭に掲げた。

5 参照記号

↓ 解説はその項目を見よ

↓ その項目を参照せよ

↑↓ 対語・反義語

略語表

品詞

〔名〕 名詞
〔代〕 代名詞
〔自〕 自動詞
〔他〕 他動詞
〔形〕 形容詞
〔連体〕 連体詞
〔副〕 副詞
〔助動〕 助動詞
〔助詞〕 助詞
〔接統〕 接統詞
〔接頭〕 接頭語
〔接尾〕 接尾語
〔感〕 感動詞
〔枕〕 枕詞

活用の種類

四 四段活用
上 上二段活用
上 上二段活用
下 下二段活用
下 下二段活用
力 力変格活用
サ 行変格活用
ナ 行変格活用
ラ 行変格活用
ク 活用
シク 活用
凡 例

學術語・専門語

〔哲〕 哲学
〔論〕 論理学
〔心〕 心理学
〔宗〕 宗教
〔仏〕 仏教
〔法〕 法律
〔經〕 経済
〔教〕 教育
〔社〕 社会学
〔美〕 美学・美術
〔言〕 言語・音韻
〔音〕 音楽
〔数〕 数学
〔理〕 物理学
〔化〕 化学
〔天〕 天文
〔気〕 気象
〔地〕 地質・地理
〔生〕 生物
〔植〕 植物
〔動〕 動物
〔医〕 医学・薬学
〔機〕 機械工学
〔電〕 電気工学
〔農〕 農林
〔建〕 建築・土木

引用文献略称一覧

▽物語・日記・和歌集の類は、一般に「物語」「日記」「和歌集」などの呼称を省略した。
▽和歌集は、勅撰・準勅撰は部立まで示し、私家集・私撰集は原則として書名だけとした。部立は次のように略した。

離別・別離↓別 羈旅↓旅 賀歌・慶賀↓賀
▽「延喜式」は民部省式・神名式などのように、「日本書紀」は神代紀上・神武紀などのように、それぞれ巻名で示した。

▽「枕草子」の章段を示す数字は岩波書店版「日本古典文学大系」本によった。

▽ここには、本文解説中に略称をもって引用した文献の主なもの掲げ、語頭の漢字の五十音順に排列した。

▽*印をつけたものは、文学作品のジャンルを表わす略語で、一字下げて列記したのがそれに属する曲名・題名である。

(ア・オ)

天草本伊曾保 天草本(あまぐん)伊曾保(イソ)物語

伊勢 伊勢物語

一代男 好色一代男

一代女 好色一代女

十六夜 十六夜(いざよい)日記

犬筑波 新撰犬筑波集

石清水 石清水(いしづみ)物語

右京大夫集 建礼門院右京大夫集

雨月

宇治拾遺

宇津保

梅曆

運歩色葉

栄華

永代蔵

桜陰比事

置土産

落窪

折たく柴

織留

(カーゴ)

蜻蛉

*伎

ア 吾孀鑑

青砥稿

上野初花

浮名横櫛

韓人漢文

勸善懲惡

小袖曾我

サ 三人吉三

島衛

助六

ナ 雷伝記

ハ 仏の原

マ 壬生大念仏

ヤ 名歌徳

四谷怪談

雨月物語

宇治拾遺物語

宇津保(うづ)物語

春色梅児誉美(うめこしよく)

運歩色葉集(うんぽいろは)

栄華物語

日本永代蔵(にっぽんえいだいざう)

本朝桜陰比事

西鶴置土産

落窪(おちくぼ)物語

折たく柴の記

西鶴織留

蜻蛉(かげ)日記

〔歌舞伎脚本〕

傾情吾孀鑑(けいせいあがみ)

青砥稿花紅彩画(あおとこうしは)

天衣紛上野初花(てんいふんじょうは)

与話情浮名横櫛(よわなせうし)

韓人漢文手管始(かんじんかんもん)

勸善懲惡視機関(かんぜんちようあ)

小袖曾我薊色縫(こそでそがあざ)

三人吉三廓初買(さんきちさんくわく)

島衛月白波(しまゑつきしろなみ)

助六所縁江戸桜(すけろくしやう)

源平雷伝記(げんぺいらいでんき)

けいせい仏の原

傾城壬生大念仏(けいせいおんぶつ)

名歌徳三舛玉垣(めいかのたくみ)

東海道四谷怪談

記 古事記

*狂 [狂言]

布施無經 布施無經(ふせなむ)

二千石 二千石(ふせなむ)

金葉 金葉和歌集

月清集 秋篠月清集

源 源氏物語

古今 古今和歌集

古本説話 古本説話集

御傘 俳諧御傘(はいかい)

後撰 後撰和歌集

五人女 好色五人女

御文章 蓮如上人御文章

後紀 日本後紀

*幸若 [幸若舞(かまいた)の本]

大織冠 大織冠(おおいし)

烏帽子折 烏帽子折(えぼし)

今昔 今昔物語集

(サーソ) 狭衣(ささ)物語

更級 更級(さら)日記

三代男 好色三代男

散木 散木奇歌(さんぼ)

詞花 詞花(し)和歌集

字類抄 伊呂波字類抄

七偏人 妙竹林話七偏人

釈紀 釈日本紀

拾玉 拾玉(しゆき)集

拾遺 拾遺和歌集

諸国ばなし 西鶴諸国ばなし

*淨

ア 朝顔話

生写朝顔話(しやうがうつしあ)

女殺油地獄(おんなのこころしあ)

井筒業平 井筒業平河内通(いつつなりひら)

生玉 生玉心中(いんぎょ)

今宮 今宮の心中(いまみやの)

妹背山 妹背山婦女庭訓(いもせやまお)

卯月紅葉 ひぢりめん卯月の紅葉(うづきの)

歌軍法 持統天皇歌軍法(じとうてんのう)

歌念仏 五十年忌歌念仏(ごじゆねねふ)

浦島 浦島年代記(うらしまね)

烏帽子折 源氏烏帽子折(げんじ)

大磯虎 大磯虎稚物語(おおいそのとらお)

大塔宮 大塔宮囃鉦(おおとうのみや)

大原問答 大原問答青葉笛(おおはらのふえ)

扇八景 曾我扇八景(そがあや)

近江源氏 近江源氏先陣館(おんじんのせんじん)

女楠 吉野都女楠(よしののめやこ)

女腹切 長町女腹切(ながのめはきり)

女舞衣 艷容女舞衣(はなごうめ)

賀古教信 賀古教信七墓廻(かこのきやうしん)

会稽山 曾我会稽山(けいざん)

蛙合戦 傾城島原蛙合戦(けいせいのいわばら)

重井筒 心中重井筒(しんじゆうか)

苧萱桑門 苧萱桑門筑紫簪(つくしのいづせん)

川中島合戦 信州川中島合戦(しんしゆうかわな)

河原達引 近頃河原達引(ちかごろわだひ)

鬼一法眼 鬼一法眼三略巻(きいちほうげんさん)

兼好法師 兼好法師物見車(けんこうのものをみくるし)

碁太平記 碁太平記白石嘶(ごたいへいきし)

氷期日 心中刃は氷の朔日(しんじゆうやいは)

国性爺 国性爺合戦(こくせんや)

国性爺後日 国性爺後日合戦(こくせんやご)

最明寺殿 最明寺殿百人上臈(さいめいじどうのひ)

釈迦如来 釈迦如来誕生会(しやくにんじうろう)

酒吞童子 傾城酒吞童子(てんどうじゆ)

聖德太子 聖德太子絵伝記(しやうとくた)

職人鑑 用明天皇職人鑑(しよくめいてんのかみ)

末松山 梶久末松山(えのまつやま)

隅田川 双生隅田川(ふたごす)

先代萩 伽羅先代萩(めいけいせ)

千本桜 義経千本桜(よんぎやうせん)

曾根崎 曾根崎心中(そねざきし)

大経師 大経師昔曆(だいきし)

丹波与作 丹波与作待夜の小屋節(たにばまさくまつ)

忠臣蔵 仮名手本忠臣蔵(かなてほん)

手習鑑 昔原伝授手習鑑(すがわでんじゆ)

天網島 心中天網島(しんじゆう)

道中双六 伊賀越道中双六(いがでえろく)

虎が磨 曾我虎が磨(そがとら)

二枚絵草紙 心中二枚絵草紙(しんじゆうし)

女護島 平家女護島(へいけ)

寿門松 山崎与次兵衛寿門松(やまざきよじべえ)

博多小女郎 博多小女郎波枕(はなまこむら)

反魂香 傾城反魂香(けいせいのう)

彦山権現 彦山権現誓助剣(ひこやまごんげん)

双蝶蝶 双蝶蝶曲輪日記(ふたつちようり)

二つ腹帯 心中二つ腹帯(しんじゆうふ)

松風村雨 松風村雨束帯鑑(まつかぜむら)

万年草 心中万年草(しんじゆうま)